サマスタ

SUMMER STUDIO

–

2019

SUMMER STUDIO 2019

REPORT

発行：公益社団法人日本造園学会関東支部 / 第 15 回 学生デザインワークショップ　サマースタジオ 2019

SUMMER STUDIO 2019 INDEX

概要

開催趣旨 P2
背景概要 P3
オリンピック ×４分野 P5
対象地・代々木公園 P7

各チーム提案

各チーム提案概要 P9
プレゼンボード
A チーム P11
B チーム P15
C チーム P19
D チーム P23
E チーム P27

まとめ

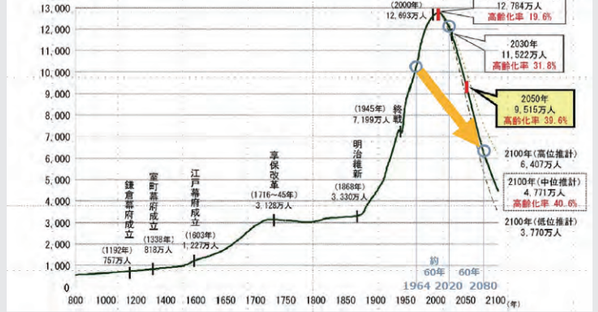
サマスタ 2019 まとめ P31
スケジュール P33
参加者 P35

サマスタ 2019 SUMMER STUDIO

開催趣旨

今から約 60 年前、1964 年の前回東京五輪は高度経済成長期に開催された。
今日より明日が良くなり成長することを信じた猪突猛進の時代。
日本の人口は下図の通り、明治期に入り急増した。
途中第二次世界大戦による減少は見られるが、大きな流れとしては一貫した上昇カーブであった。2004 年にピークを迎えると、そこから一気に減少する予想で、既に 2020 年の次回東京五輪時は増加から減少の局面に変わっている。
前回のオリンピックから今回のオリンピックまでの年数である 60 年間が経過した 2080 年時点での人口予測は 6000 万人強。前回オリンピック時どころか、大正から昭和の初め頃の人口まで減少する予想である。これは、明治・大正・昭和・平成時代の過去から現在までの延長に未来があるという成長モデルは使えないことを意味する。
1964年東京五輪のレガシーである代々木公園に2020 年東京五輪のレガシーとして何を残すか？環境の基礎となる地形･水系を再考し、未来が予想不能な令和時代の始まりに開催する 2020 年東京五輪をきっかけに、オリンピックムーブメントの 3 本柱である「スポーツ」･「文化」･「環境」を手掛かりにして、「五輪ミュージアムパーク」を描く。

参照：https://www.joc.or.jp/eco/
サマースタジオ HP：https://www.kanto.jila-zouen.org/designws/designws-index.htm



出典：「国土の長期展望」中間とりまとめ（国土交通省）

「60 年後に残るものは何か？」 5 チームが提案する代々木公園の未来像

A team | SHARING PARK

B team | スカイスケープ

C team | 東京暮らし方改革発信基地 YOYOGI
”ニードレス”は、大地を潤し都市を耕す

D team | 重なる４年、重ねる行い

E team | 出日和地
弔いと憩いによる「死」を通じた相互理解を育む五輪ミュージアムパーク

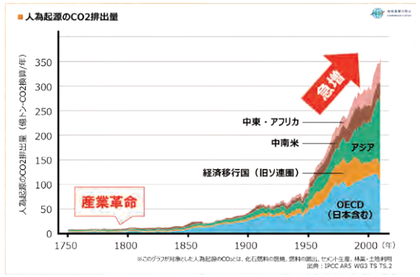
2015 年からのワークショップの大テーマ『東京オリンピック・パラリンピックをきっかけに、東京の都市の未来像を提案する』を考える上で、共通して未来像を描くことは必要である。このページでは、今回の 2019 年のテーマ「６０年後の代々木公園に何を残すか？“五輪ミュージアムパーク”を描く」の中で重要なキーワードである「60 年後」「レガシー」「ミュージアム」そして「オリンピック」に注目する。

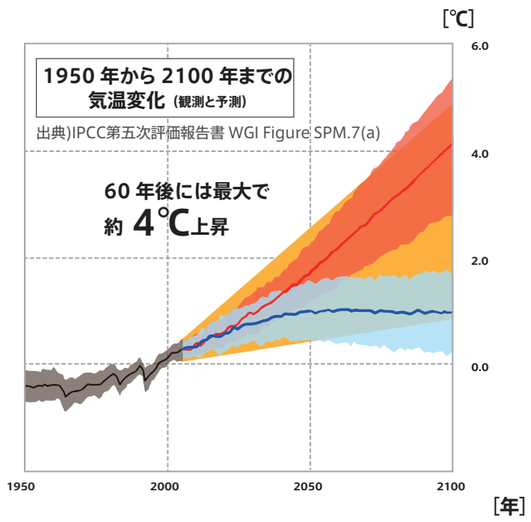
60 年後の地球の未来はどうなる！？

60年後の未来を考える上では、日本だけでなく、世界、地球まで目を向ける必要がある。
ここでは、将来を予測するものさしとなる「環境」「人」「交通」３つの視点から見てみよう。

環境

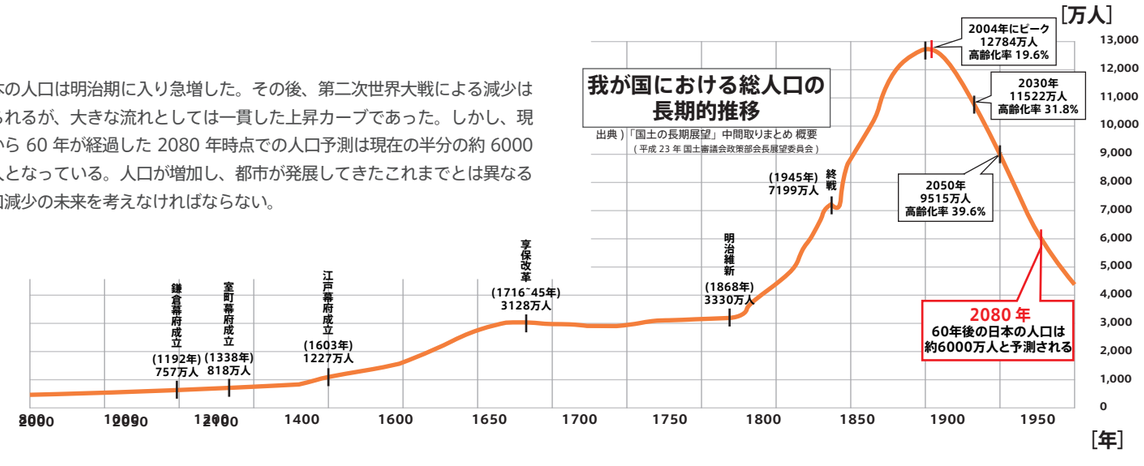
現代、地球温暖化による環境問題が叫ばれている。異常気象を始め、干ばつ、洪水、食糧生産問題、海面上昇などが生態系や人間の生活にも影響を与えている。これら地球温暖化は人間活動が主な要因の可能性が高い。有効な温暖化対策をとらない場合、60 年後も環境問題のさらなる進行が懸念される。私たちは地球温暖化に対し適応策・緩和策を考えていかなければならない。





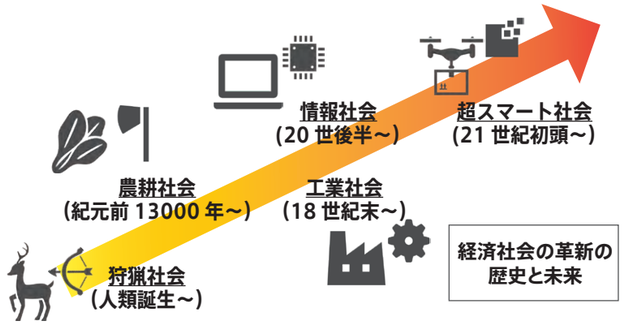
人

日本の人口は明治期に入り急増した。その後、第二次世界大戦による減少は見られるが、大きな流れとしては一貫した上昇カーブであった。しかし、現在から 60 年が経過した 2080 年時点での人口予測は現在の半分の約 6000 万人となっている。人口が増加し、都市が発展してきたこれまでとは異なる人口減少の未来を考えなければならない。



交通

交通における未来は、技術の発展とともに進化していく。2050 年頃には世界人口の約 70%が都市部に集中すると予測されており、今後 30 年間で交通手段のニーズは劇的に変化すると考えられている。現在でも「ドローン」、「自動運転」などが注目されているが、インフラの整備・制度といった整備や、まちそのものの姿も交通とともに変化してゆくだろう。

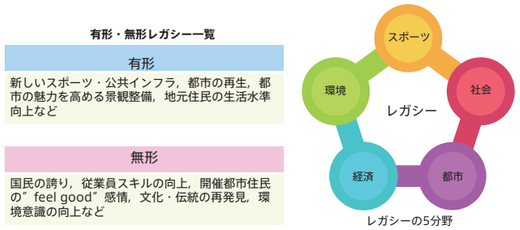


レガシーとは

レガシー（legacy）は遺産、先人の遺物の意。本来は「亡くなった人が遺した財産」を意味するが、派生的に「世代から世代へ受け継ぐものごと」も意味し、物理的・精神的遺産を指す。

レガシーとオリンピック

国際オリンピック委員会（IOC）によれば、レガシーとは「長期にわたる、特にポジティブな影響」とされている。レガシーには「有形（tangible）」のものと「無形（intangible）」のものとがある。IOC はオリンピック憲章の中で、大会のポジティブなレガシーを築くことが自分たちのミッションであると明記し、具体的に５つの分野に分けられる。



レガシーの5分野

オリンピズムとは近代オリンピックの理念であり哲学的原理である。オリンピックがワールドカップなどの他の国際的な競技大会と決定的に異なる点は、大会の根底にオリンピズムが存在している点である。
クーベルタンは，人間における肉体と精神の調和を１つの理想とし，スポーツは人間の精神を高めるものであると考えた。クーベルタンはオリンピズムとして，「スポーツを通して心身を向上させ，さらには文化・国籍など様々な差異を超え，友情，連帯感，フェアプレーの精神をもって理解しあうことで，平和・よりよい世界の実現に貢献する」を提唱した。

レガシーの例

日本のレガシーの場合

首都高のかかる日本橋川

ピクトグラム

1964 年の東京オリンピックでは、高速道路や新幹線をはじめとするインフラやユニットバス、東京大会で初めて使われたピクトグラムなどがレガシーとして現在にに受け継がれている。

海外のレガシーの場合

BRT（バス高速輸送システム）

閉鎖中のゴルフ場

2016 年リオ大会では、公共交通機関がレガシーとして残り、利用され続けている。地下鉄 (延長工事)、BRT(デオドロ地区 - バーラ地区バス高速輸送システム)、路面電車 VLT が現在も多くの人に利用されている。一方で、今も残る競技施設が存分に利用されているとは言い難い状況もある。

ミュージアムとは

ミュージアム（museum）の日本語訳は、「博物館・美術館」であるが、動植物園、文学館、科学技術館など多様なタイプがある。国際博物館会議（ICOM）では、「ミュージアムは、社会とその発展のために奉仕する、非営利で常設の一般に公開される機関であり、教育、研究、楽しみを目的として、人類とその環境の有形および無形の遺産を取得、保存、調査、伝達、展示するもの」と定義している。

ミュージアムの役割

ミュージアムでは、何らかの分野について価値のある事物や資料・作品・美術品・情報等が収集される。また、学芸員やキュレーターなどの高度な専門性を有するスタッフが研究や企画等を推進し、魅力あふれる工夫が施された展示や施設等を通じて、社会に開かれた「場」をつくっている。すなわち、ミュージアムは芸術や学問、文化や社会の基盤を支え、地域のあり方に示唆を与えるためのものであり、魅力や価値を競争する場、人々の繋がりや関係を生み出す場でもある。

金沢 21 世紀美術館「明後日朝顔プロジェクト 21」地元の中学生とボランティアが植えた苗が育った朝顔。美術館はプロジェクトのコンセプトをコレクションの対象として購入。

展示方法から見るオリンピックミュージアム

オリンピックミュージアムは、開催前にはオリンピズムを発信し、開催後もレガシーの一つとして残り続ける。その展示の方法は様々。旭川動物園の動物の成功した展示方法に見るように、展示方法・発信方法は重要である。従来の動物園は形態展示で動物の姿を展示し、行動展示は動物の生態、つまり動物の“本質”をよく引き立つように展示する。ただメダルや写真を展示するだけではなく、オリンピックの楽しみや考えの本質をミュージアムから発信することが大切である。

2019 年にオープンした日本オリンピックミュージアム
大画面で迫力ある映像やメダリストの考え方、スポーツを体験できる場所を用意している。

オリンピック ×４分野

思考の序章

ーオリンピックに結びついた話題提供を受けてー

× **4つの分野**

ワークショップに先行して、
キックオフミーティングにて
４人の先生方の講義を拝聴
しました。

文：高橋美里
東海大学　観光学部３年

Olympic Movement

嵯峨 寿 氏
日本オリンピック・アカデミー(JOA)理事
日本オリンピック委員会(JOC)
オリンピック・ムーブメント専門部会員

「スポーツ」「文化」「環境」の３本柱の基本理念から成るオリンピズム、開催に関わる社会の動きであるオリンピックムーブメント、これらを欠かすことのできない世界大会がオリンピックだ。プロ選手たちのプレーを魅せる場、選手たちとの直接のコミュニケーションを通してサポート心が生まれる場。それらはミュージアムの一種であり、オリンピックムーブメントの中心に存在する。

その渦中にいる者たちは、人工的に作られた渦だと意識せずにいるだろう。特定の商品や人物が売れるようなことだとしたら、胡散臭いと感じるかもしれない。しかしスポーツのもつ神聖感、ピュアさ、高潔さにより、ムーブメントはさわやかとすら思える。起爆剤こそあれ自ずから発生した、このパワーの塊を、ポジティブに活用しない手はない。

Sightseeing

田中 伸彦 氏
東海大学観光学部観光学科　教授

2020 東京五輪では東京への交通規制が行われるが、これは観光業界にとってオリンピック効果がある、と言えるだろうか？オリンピックに限った事ではない。人々にどのようにして訪れてもらうか、そこでどのように過ごしてもらうか。観光と造園は、実のところ同じ方向を見つめているのだろう。

多くの国民が液晶に張り付けになることであろうオリンピック開催期間中は、全国の観光地において閑散期になるに違いない。観光地もオリンピックもスポーツも、気持ちだけでは続けられない。片や需要者は、供給者が稼ぎを考えないことこそ美点である、純潔であると感じ取る。アスリートにはスポンサーがついている。観光地にとってのスポンサーは一体誰なのだろうか。

Green Infrastructure

福岡 孝則 氏
東京農業大学地域環境科学部造園科学科　准教授

グリーンインフラとは、既にある自然と環境資源を創造的に活かし多様な機能を引き出すことで、一つの場所で複数の目的を達成することができる取り組みである。都市に生きる人々が今求めているものは、都市の中にない自然や余白である。屋外空間の機能と魅力、人々の生活の質を高めるランドスケープ的な考え方が、これからの時代を背負い立つのではないだろうか。

グリーンインフラとオリンピックの共通点は確実に同一のものにはならないところ、場の既存のものを活かすところである。我々は唯一無二の場所を求めている。場は、応えようと奮闘しているが、個性の出し方自体がテンプレート化し、似通ったサービス、既視感のある企画にあふれている。そこにしかない、そこでしかできない、を見つけるためにランドスケープアーキテクトの考え方は重視されるべきである。

Public Space

竹内 智子 氏
東京都東部公園緑地事務所　工事課長

パブリックスペースの一つである代々木公園は、文化や社会の受け皿である。国際交流の場として、竹の子族の活動拠点として、また時にはデング熱騒動の渦中に代々木公園はあった。今では春の花見、園内にできた保育園、冬夜を彩る「青の洞窟」等で多くの人々を集める。練兵場、米軍住居、選手村、そして都市公園へとその用途が変化する中で、人々の思い、熱の受け皿でもありながら、それらの発信地を担ってきた。

パブリックスペースは、電子辞書ではなく紙辞書である。普段意識しない、出会わないようなものに出会うことができる。オリンピックにも似たところがあるだろう。「こんな国があるのか。こんな競技が強くて、こんな人たちが応援しているんだ。」と。自分の興味がある物だけにピンポイントでたどり着いてしまうような社会、電子辞書的な現代において、紙辞書的なパブリックスペースは渇望されるべき存在なのではないだろうか。

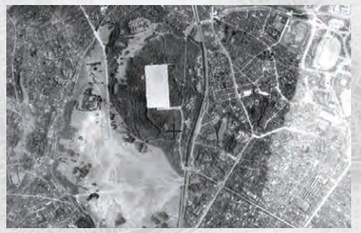
対象地・代々木公園

代々木公園の歴史

代々木公園は時代によって様々な利用がされてきた。かつて荒地だったこの場所は江戸以前では大名屋敷、明治～戦時中までは練兵場、1964年東京オリンピックには選手村、そして
現在は公園として人々に開かれている。

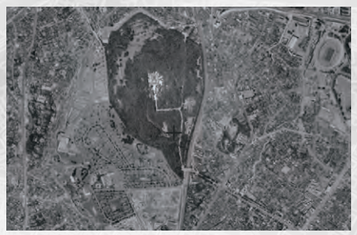
江戸末期、代々木公園と明治神宮内苑周辺は大名屋敷であった。

江戸時代
「大名屋敷」



戦時中は代々木練兵場として利用され、終戦以降は米駐留軍の住まいとして利用された。

1936 年ごろ
「練兵場」

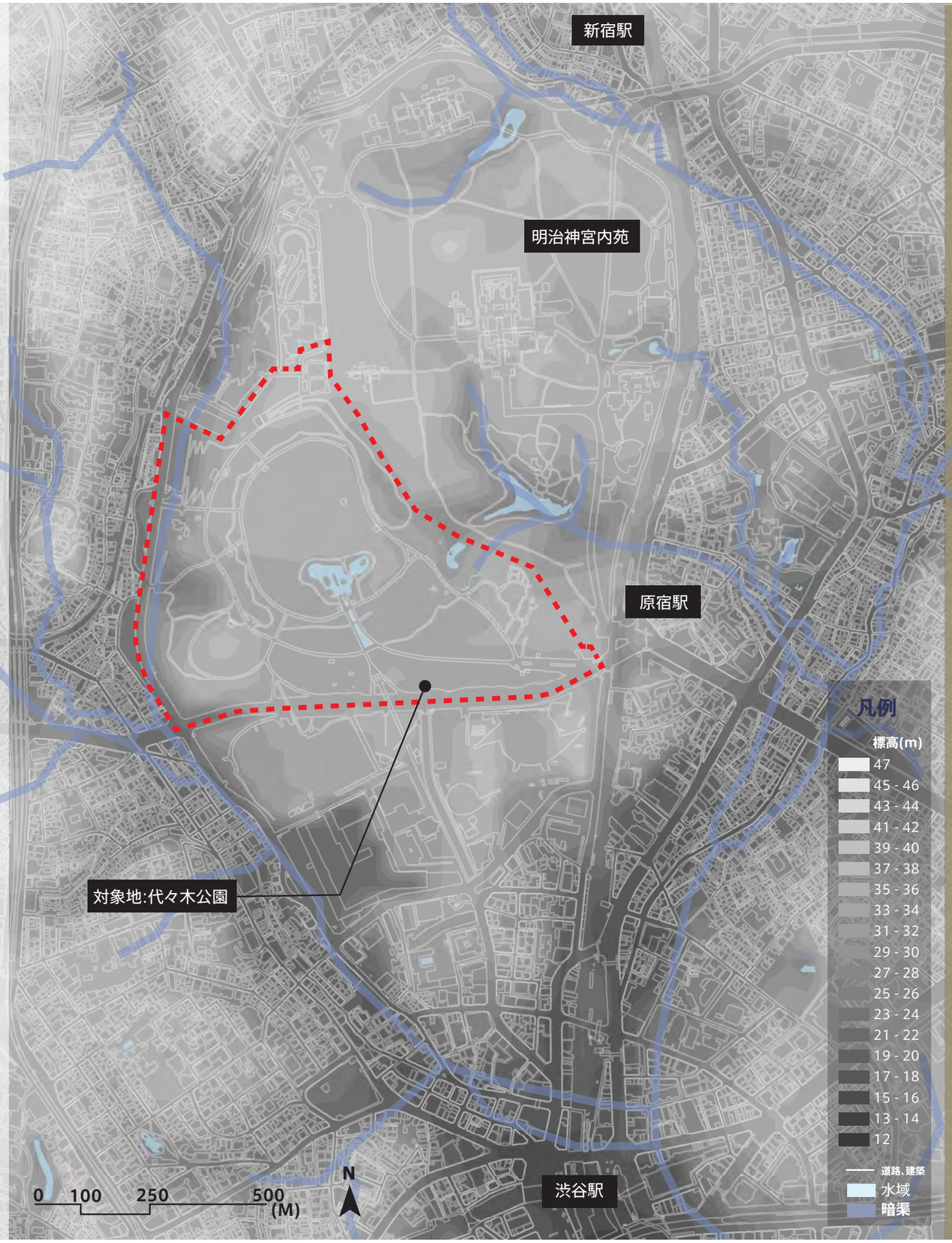


東京オリンピックに選手村として利用された後に、池原謙一郎氏の案が採用され代々木公園が誕生した。

1964 年ごろ
「選手村」

公園になってから約 50 年が経ち、成長した樹木が隣接する明治神宮と一体となって広大な森を形成している。

現在
「公園」



明治神宮と代々木公園

代々木公園に隣接している明治神宮内苑は、造園学の祖として知られる上原敬二らによって「100 年の森」として計画され、2020 年に鎮座 100 年を迎える。

明治神宮の植生遷移予想図

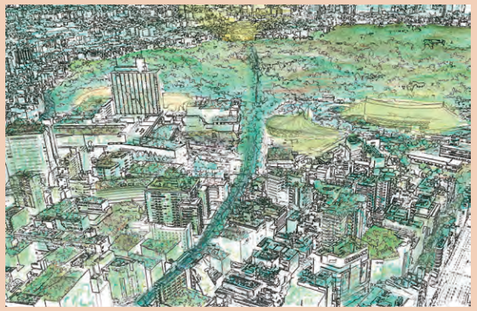
既存樹や献木として植樹された樹高の高いマツ類が主木である仮設の森

マツ類以外の針葉樹が生育し、7 ～ 9mほどに成長

カシ、シイ、クスの常緑広葉樹が成長し、支配木に

常緑広葉樹がさらに成長し、現在は極相林になっている

A team SHARING PARK



ICT の発達により、実体的なコミュニケーションの希薄化が起きるのではないか。

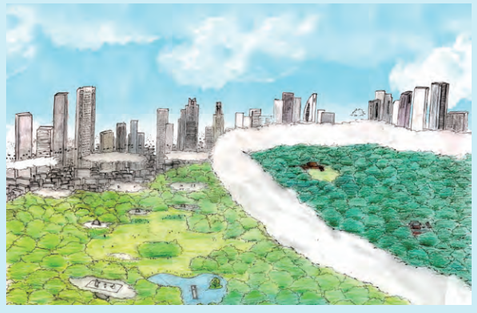
▶

ICT ではなく植物を介し、交流が生まれる居場所のコアとなる場が求められるのではないか。

私たちが目指すのは、ICT により効率性を求めて必要な情報だけをやり取りする世の中ではなく、人同士が生身でふれあって、そこから思いがけない出会いやつながりが持てる世界だ。地域の人々を巻き込み植物をきっかけとした交流の場を提案する。

P11

B team スカイスケープ



60 年後は人間の移動圏として空の利用が進んでいるかもしれない。

▶

空の利用の変化に対し、求められる公園の新しい形があるのではないか。

現在 2023 年に空飛ぶクルマの実用化を目標として試験飛行等が行われており、60 年後には大幅に交通の変化が起きているだろう。空の利用により起こりうる環境問題、人間が上からの視点を獲得することに対し、新たな公園のあり方を考える。

P15

C team 東京暮らし方改革発信基地 YOYOGI

“ニードレス”は、大地を潤し都市を耕す

公園とその周辺では、環境の基礎である地形・水系が見えにくくなっている。

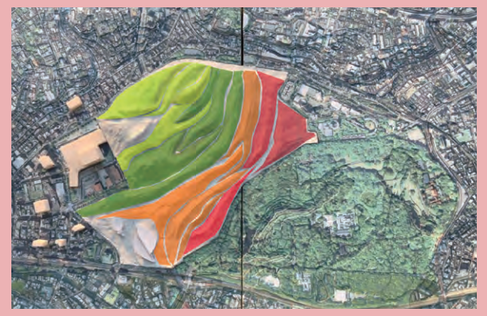
▶

地形・水系を感受する暮らしが都市の本来のあり方なのではないか。

かつて水の都と呼ばれた東京。水系は暗渠になり都市に覆われ、もとの地形や水系は見えづらくなっている。水環境は常に人々の暮らしと共にある。大地で雨を受けとめ排水も浄化してシェアする、これからの東京の暮らし方を発信する場が代々木公園である。

P19

D team 重ねる４年、重ねる行い



６０年後の大きな課題は気温上昇による気候変動である。

▶

視覚的・体感的に気温上昇の影響を感じる場所が必要なのではないか。

気候変動の事態は深刻で気温上昇を引き金とした破滅に向かう未来を想像できているだろうか？我々の提案は植物を段階的に植えていくことで、気温上昇の実態を体感する場を設け、世界中の人々に危機感を持たせるものだ。意識は変えられる。意識は未来を変えられる。自然の狂気に怯える未来は変えられるのだ。

P23

E team 出日和地（でびよりち）

弔いと憩いによる「死」を通じた相互理解を育む五輪ミュージアムパーク

人口減少の深刻化や国際化・移民の増加などの社会問題を抱えている東京。

▶

多種多様な人々の最期を受け入れる空間が必要となっていく。

人口減少による影響で「死」に対しての価値観が前向きに変化し今後は機能よりも公共性の高いものが求められていく。その中で死を根底とした生の空間「明治神宮の森」に隣接する都市公園「代々木公園」のあり方を再考する。

P27

A team SHARING PARK

summer studio で得たこと

掘越　義人
Yoshito Horikoshi
法政大学大学院
デザイン工学研究科 M 1

「伝えることの難しさ。」

大石　珠央
Tamao Oishi
早稲田大学芸術学校
建築都市設計科　B 3

「自分の意見を粘り強くぶつけてみることの大切さ。」

川口　豊
Yutaka Kawaguchi
多摩美術大学
美術学部　B 3

「お互いの強みを活かしたグループワークの仕方を学べたこと」

濱宇津　菜々子
Nanako Hamaudsu
東京農業大学
地域環境科学部　B 3

「感じて、考えて、伝えることの大切さと難しさ。」

増山　大史
Taiji Masuyama
日本大学
生物資源科学部　B 3

「色々な分野の人との関わることの重要性」

高沖　哉
Hajime Takaoki
ヒュマス

「オリンピズムと向き合う事は都市の有り様と人の生き方のこれからを考える契機となった。」

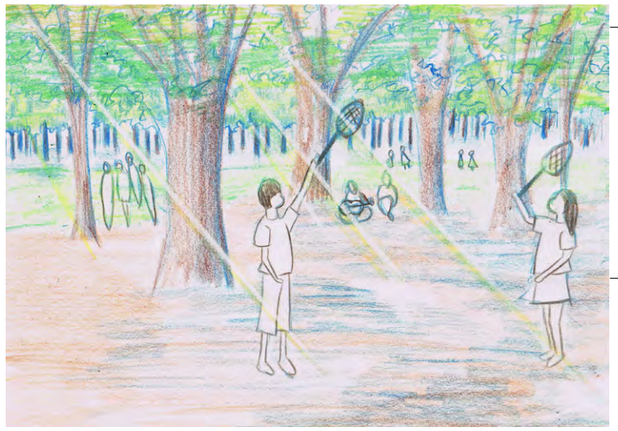
井野　貴文
Takafumi Ino
グラック

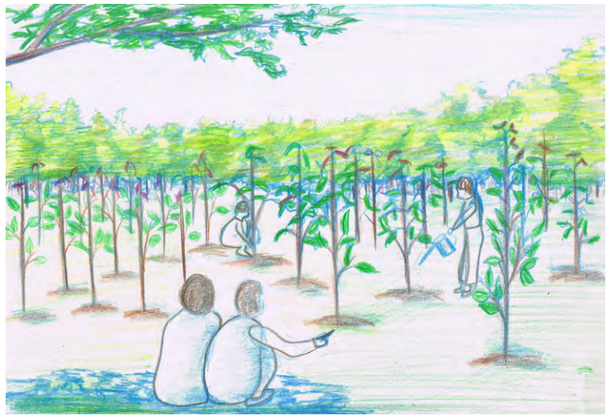
「60 年後という想像つかない未来を描くことの大切さ。」

オリンピックミュージアム

私たちが考えるオリンピックミュージアムとはスポーツを行う行為や、文化的な活動そのものを展示する場というものだけではなく、アイディアやムーブメントが生み出される「瞬間そのもの」を展示する空間だ。スポーツや文化が生み出されるきっかけや発展には、発想力や想像力が不可欠だ。A チームはそのような「！」の状況をつくりだす手助けとなり、コミュニティーに様々な働きかけをしてくれる要となるものが植物であると考える。都市の暮らしの中で植物が、自分や、家族、友達、また特定の誰かではなく、思いがけない人やもの、瞬間に出会わせてくれ、人々と植物の循環によって都市空間が守られていく状態を生みだす。

SHARING PARK



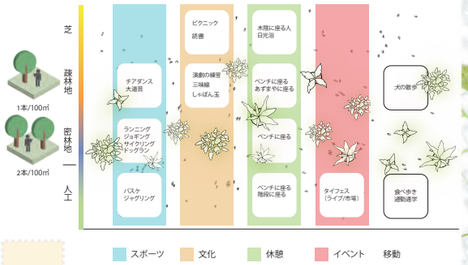


Concept

私たちが目指すのは、ICT により効率性を求めて必要な情報だけをやり取りする世の中ではなく、人同士が生身でふれあって、そこから思いがけない出会いやつながりが持てる世界だ。代々木公園のポテンシャルと将来の都市像を重ね、植物をきっかけとしたコミュニケーションの場づくりを提案する。

代々木公園

現在の代々木公園では、私たちが未来に残すべきだと考える、人々の生身のコミュニケーションが盛んに行われている。60 年後も今の代々木公園にある良さを維持し、さらに、植物をきっかけとして交流が生まれる場をつくりたい。その交流によって維持管理されていく植物が公園の外へと広がり、都市の緑地をつないでいく。



Activity map ... 現在代々木公園で行われている活動と場所の関連性

オリンピズムと都市

オリンピック精神である三つの柱、「スポーツ」、「文化」、「環境」は心身の健康という土台がなければ成り立たない。都市の人口増加、気候変動、高齢化社会など多くの危機に直面しているからこそ、私たちは都市全体が公園のように歩きやすく、コミュニケーションが生まれやすい心身の健康を保持できる環境を実現したい。

「代々木公園をコアとした、植物を介して交流が生まれる空間の創出」

代々木公園からの植生が人々のコミュニケーションを通して都市に広がる

公園通り：緊急時のレーンは確保し、通常は歩行者専用

7 つのアプローチ

現在、代々木公園へのアクセスは一か所に集中しており、実際に歩いてみて、その他の出入り口は公園と街が分断されている印象があった。人々の交流を増やすには公園がより身近に感じる存在でなければならない。そのためにこのアクセスしづらい現状を 60 年というプロセスをかけ、大きく分けて 7 つのエリア（新宿、代々木、千駄ヶ谷、原宿、表参道、渋谷、代々木八幡）で考えそれぞれの谷や丘などの地形、歴史的背景などを考慮し、公園への直接的なアプローチの実現を目指す。

日ごろ公共の交通機関などを利用していると認識しづらいが、代々木公園から渋谷駅までの距離は約 1.2km と十分に歩ける距離だ。代々木公園から広がってゆく緑が人々が歩きたくなるような都市を形成し、人々の心身の健康を支えると共に、その環境の基盤となる緑地は様々な人のコミュニケーションによって管理運営される。特に渋谷のエリアは既存のスポーツ施設や日本の文化の発信地であり、このムーブメントにより新たなオリンピックのレガシーを残すことができると考える。

1/2500　500 m

B team スカイスケープ

summer studio で得たこと

廣田 龍平
Ryuhei Hirota
日本大学大学院
理工学研究科　M 1
「チームで発揮できる案の爆発力！」

増田 政弘
Masahiro Masuda
法政大学大学院
デザイン工学研究科 M 1
「未来を考えることの難しさと
徹夜を乗り切る根性」

佐藤 あかね
Akane Sato
東京農業大学
地域環境科学部　B 3
「自分の本当に好きなこと」

田中 真由
Mayu Tanaka
千葉大学
園芸学部　B 3
「他分野の人たちとの関わり
による視野の広がり」

原﨑 寛明
Hiroaki Harasaki
アイボリィ
アーキテクチュア
「60 年後の未来を想像する楽しさと
描くことの大変さ」

水嶋 輝元
Terumoto Mizushima
日建設計
「参加学生さん達の魅力的な提案に
とても刺激を受けました！」

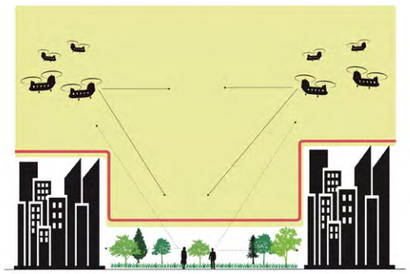
向山 雅之
Masayuki Mukoyama
竹中工務店
「参加してくださった方々の未来を想う熱い心」

○Concept

東京都心の利便性向上とそれに伴い発生する環境問題に対して、緑とオープンスペースは歴史的に重要な役割を担ってきた。
都市交通の発達により、空の交通が始まった 60 年後でも代々木公園は都心で広く青い空を有し、2020 年の東京オリンピックを契機とした今の文化をレガシーと捉え、オリンピズムの一つである、自然環境の保全を強く意識した公園を提案する。

○スカイスケープ の捉え方

ドローンで空を飛べるようになることで、上下移動が可能となり、日常的な人の移動は、地上から地上と空両方へと変化する。
代々木公園の上空、周辺の建物も含めた空の形状を"地形"と捉える。これが空の交通が発展したことによる新しい土地の捉え方のランドスケープ（＝スカイスケープ）である。



○東京都心の歴史

現在の東京都心は江戸時代、徳川家康が開幕し、江戸城を中心としたまちづくり及び社会基盤整備を実施し、海岸線を埋め立て、濠を形成し、日本橋を起点とした五街道等の主要交通網を整備したことで劇的に変化した。
空襲によりボロボロになった東京は 10 余年あまりの戦後復興期を経て、瞬く間に飛躍的な経済成長を遂げ、高度経済成長期に入り、1964 年に東京オリンピックが開催された。

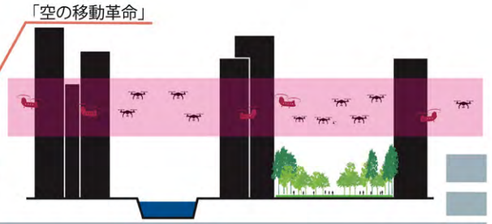
1964 年東京オリンピック

人口膨張とモータリゼーション化への対応を迫られていた東京都心では、オリンピックを契機に突貫的にインフラ整備が行われ、河川の上を首都高速道路が通るなど、多くの空の空間が失われた。

現在の自動車のように手軽に乗り降りできる次世代のモビリティー「空飛ぶクルマ」は、社会や産業構造を一変させる可能性を秘めている。
2030 年代から空の移動が可能になった場合、2080 年代の東京都心は人の移動や物の輸送のみならず運動や娯楽、日常の生活の豊かさは舞台を空に移すことが予想される。

2030 年代～：空を利用し人の移動が始まる
2020 年代半ば～：空を利用し物の移動が始まる

「空の移動革命」



1945 — 1964 — 2020 — 2080

○代々木公園の歴史

1936 年（代々木練兵場）

1950 年代（ワシントンハイツ）

1970 年代（オリンピック後）

代々木練兵場、ワシントンハイツ、オリンピック選手村を経て公園となった代々木公園にはバードサンクチュアリやペデストリアンデッキなどが日本で初めて取り入れられ、新たなランドスケープや公園という新しい価値観と場所性をもたらした。

2020 年東京オリンピック

「都心で一番広い空が見られる公園」

代々木公園は都立公園の中で 5 番目に広い面積を持ち、休日には草地で寝そべる姿や軽い運動している人々が見られる。平日は幼稚園児の遠足や、周辺の学校の生徒たちがマラソンやストレッチを行っている。

○空の利用による環境課題

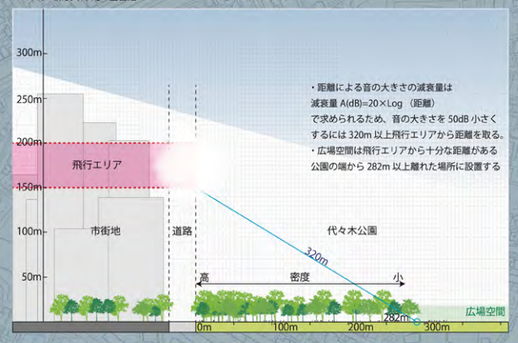
「空の移動革命」により、東京都心の空は多くのドローンなどが飛行する。その際、空の風景を阻害するだけでなく、騒音や鳥などの空を生活圏とする生物への影響が懸念される。
代々木公園上空も空の風景が阻害され、魅力の一つである「都心で一番広い空」がなくなってしまう可能性がある。

Master Plan

○防音エリア

音の大きさのイメージ
120dB：飛行機のエンジン音
100dB：電車が通るときのガード下
80dB：電車の車内
60dB：普通の会話・流しに水を流す音
40dB：深夜の市内・図書館

空に多くのドローンが飛行する未来の東京都心では大きな騒音が予想される。そこで、ドローンの飛行区域からの距離間と公園内の地形と樹木を活かし、現在の代々木公園と同じ音の大きさを実現する。現在の都市公園では約 50dB、ヘリコプターが約 110dB である。これらの値を参考に技術に進展によってもたらされるドローン自体の防音効果に、公園整備による防音効果を加えることで、今より快適な公園となる。



・距離による音の大きさの減衰量は
減衰量 A(dB)=20×Log（距離）
で求められるため、音の大きさを 50dB 小さくするには 320m 以上飛行エリアから距離を取る。
・広場空間は飛行エリアから十分な距離がある公園の端から 282m 以上離れた場所に設置する

木の減音効果
・下層植物を多く持つ
・立木密度が高い
・常葉樹林など葉がしっかりとついている

これらの条件を満たす樹木は減音効果が高い

代々木公園内で飛行区域に近い場所では、音の大きさが十分に小さくならない。道路に近い方には密度の高い樹木を配置し、公園の中心に向かうにつれて密度が低くなるよう樹木を配置する。

○芝生広場

1964 年東京五輪後に公園へと転換され、現在では「都心で一番広い空が見える公園」となっている。この受け継がれてきた代々木公園の風景こそが 2020 年東京五輪のレガシーであると考える。中央広場から見られるこの風景を人々の生活の喜びさが空へと移った 60 年後の東京であっても、公園の土に足をつけ、木々のざわめき・小鳥のさえずりとともに広大な青い空が見られる心やすらぐ空間をつくる。

○生態系保全エリア

都市公園としては日本で初めてバードサンクチュアリが整備された代々木公園には多くの野鳥が生活している。空の新しい交通により新宿御苑などとの都内の緑のネットワークが切断され、代々木公園と周辺の都心の緑を飛び交わる鳥の緑地間の移動や生活圏が制限されてしまう。隣の明治神宮と一体となった生態系の保全エリアを作り、鳥にとっても住みやすい空間をつくることで、人と他の生態系が共存できる公園になる。

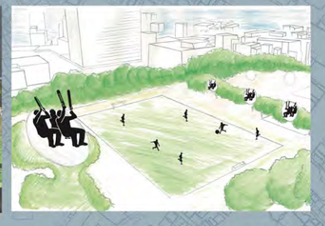
代々木公園と新宿御苑・赤坂御所・皇居などの周辺に緑のネットワークを形成する。渡り鳥の移動経路を確保し、都内の貴重な緑の空間を可視化することで、鳥にも優しい環境を都内に形成する。

○空のアクティビティエリア

人の行動が空へ遠出したことで、風景の捉え方やこれからのランドスケープの考え方が変化する。今までは地上から見た風景を考慮した都市空間や公園の整備がされてきたが、これからは空間をより立体的にとらえた整備が求められる。
代々木公園では植栽の配置とドローンの技術を融合し、地上からだけでなく空から見ても楽しめる空間を創出する。

この地区には代々木公園 A 地区内で唯一、ドローンに乗って上空から公園と都心の風景を一望できる展望台を設置する。展望台は植栽の間を自由に動くことができ、中央広場からの風景を阻害しない程度まで上下にも動くことができる。
この展望台からは、昼には四季を感じることのできる新しい公園の風景を見て、くつろぐことができ、夜には東京都心のビル群が作り出す夜景や代々木公園内でのライトアップを見て楽しむことができる。

○空のアクティビティエリア・B 地区



陸上競技場、サッカー場、代々木体育館等がある空のアクティビティエリア B 地区では、空からスポーツ観戦ができたり、雲のドローンにつけられた照明などによる演出効果を得られたりする。オリンピックゆかりのある施設でのスポーツ観戦や利用がより盛んとなる。また、現在のサッカー場の位置に、サッカースタジアム構想が発表されており、サッカー以外のスポーツや、コンサートなど音楽、カルチャーイベントとの様々な融合が考えられており、それとの連携で文化的なアクティビティが盛んとなる場となる。
ここでも防音対策として施設の周りに樹木を植えることで、A 地区と共に緑のネットワークが広がる。

0m　200m

C team 東京暮らし方改革 発信基地 YOYOGI

～“ニードレス”は、大地を潤し都市を耕す～

笹原　洋平
Yohei Sasahara
千葉大学大学院
園芸学研究科　M1

summer studio で得たこと

「絵で語り、プラスの議論を重ねることが良い提案への近道であること。」

田邉　喬太
Kyota Tanabe
法政大学大学院
デザイン工学研究科　M1

「手を動かすこと、自分の成長、新しい出会い」

松戸　香奈枝
Kanae Matsudo
千葉大学
園芸学部　B3

「１対１ではない伝え方・受け取り方」

田中　晋
Susumu Tanaka
東京農業大学
地域環境科学部　B3

「ひとつに向かうこと」

杉山　茂樹
Shigeki Sugiyama
日建設計

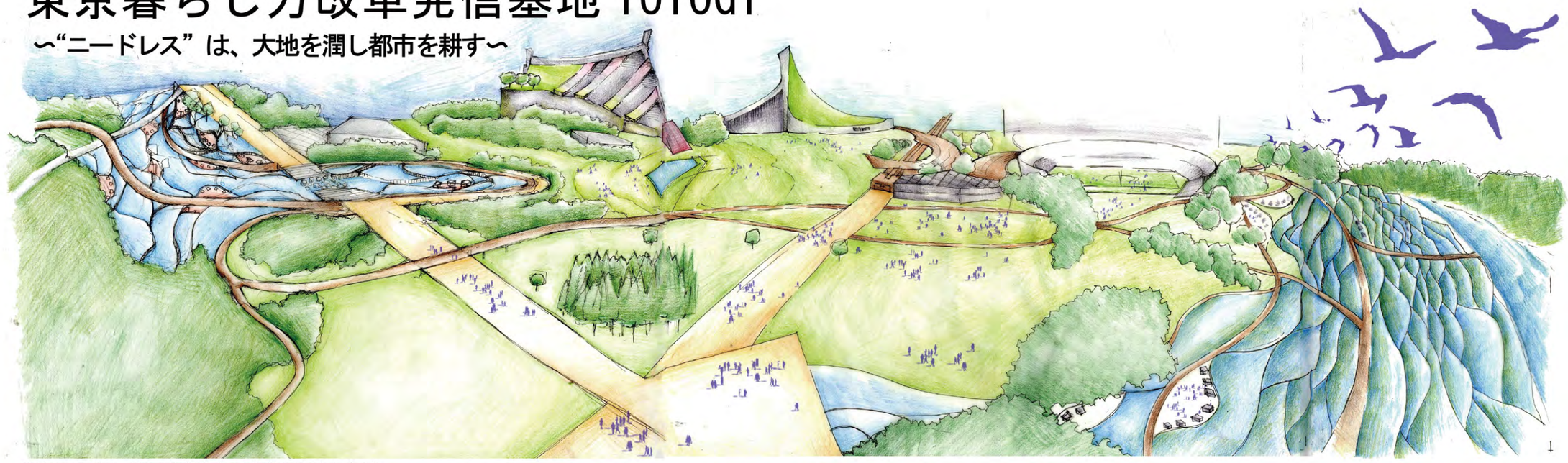
「手を動かしながら考えることの大切さ。チームワークの大切さ！」

小粥　慶子
Keiko Okai
小野寺康都市設計事務所

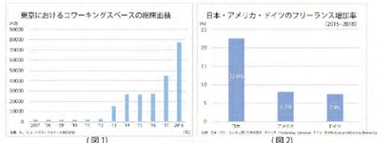
「短期集中の高エネルギーを一緒に体感できてよかったです。」

東京暮らし方改革発信基地 YOYOGI

～“ニードレス”は、大地を潤し都市を耕す～



● Target-“ニードレス”とは（＝定住が必要でない人々）-



移動しながら暮らす「非定住型住人“ニードレス”」をターゲットとする提案である。働く場所が自由に選択でき、定住が必須ではない世の中に変化していることがわかる（図1, 図2）。

“ニードレス”は今後増加すると考える。“ニードレス”は魅力的な都市を実現する発信者となる。

ニードレスの住処（A）：春の小川エリア

浄化水が流れていく空間で、ゆっくりと作業をしたいビジネスマンニードレスが主に集まるエリアとなる。

2080 年の東京の様子：緑形緑地

東京でランニングをしたくなるような日がもうすぐやってくる。

2080 年発信基地 YOYOGI の様子：代々木体育館

老朽化した代々木第一体育館は建築の特異性を残しながら賑わいの拠点として生まれ変わる。

0.Analysis- 地形水系がみえづらい公園周辺 -

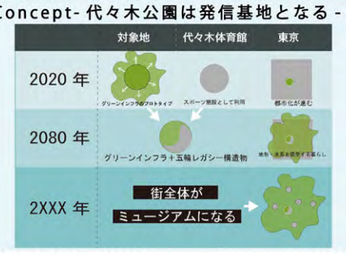
切り開かれた丘（公園西側）

暗渠化された川（原宿）

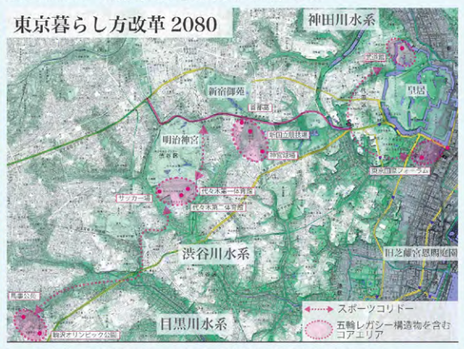
ハザードマップ（赤枠が対象地）

60 年というスケールのまちづくりでは、恒常的な変わらないもの（地形水系）を軸として考える必要がある。

1.Concept- 代々木公園は発信基地となる -



2.Vision- 地形水系を感受する暮らし -

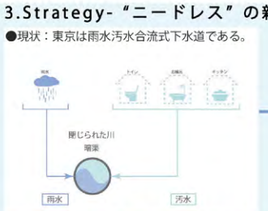


「東京暮らし方改革 2080」として地形水系を感受する暮らしを目指す。

東京には隠れた地形水系が存在する。暗渠化された川などを解放して、水系沿いに線形緑地を創り、まちとまちを緑で繋ぐ。その後、スポーツコリドーとしての役割を果たす

3.Strategy-“ニードレス”の新たな水循環「Co-Watersystem」-

●現状：東京は雨水汚水合流式下水道である。



●提案：ニードレスは水をシェアし、下流に浄化水をもたらす。

●水系沿いに“ニードレス”が広がり浄化水を流す。

東京は汚水と雨水を一緒に流す合流式下水道である。下水化された水系は閉じられ暗渠となった。

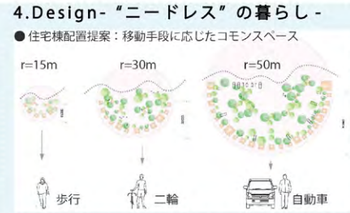
そこで“ニードレス”の新たな水循環「Co-Watersystem」を提案する。分別排水により、各排水に見合った浄化が行われ、下流に浄化水を流す。

水系沿いに“ニードレス”の居場所は広がり、やがて河川は開渠化されていく

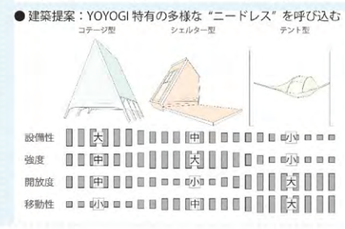
浸水などの豪雨災害の軽減を直接解決として試みる。“ニードレス”は移動しながら暮らすため、災害に対応可能である。

4.Design-“ニードレス”の暮らし -

● 住宅棟配置提案：移動手段に応じたコモンスペース



● 建築提案：YOYOGI 特有の多様な“ニードレス”を呼び込む



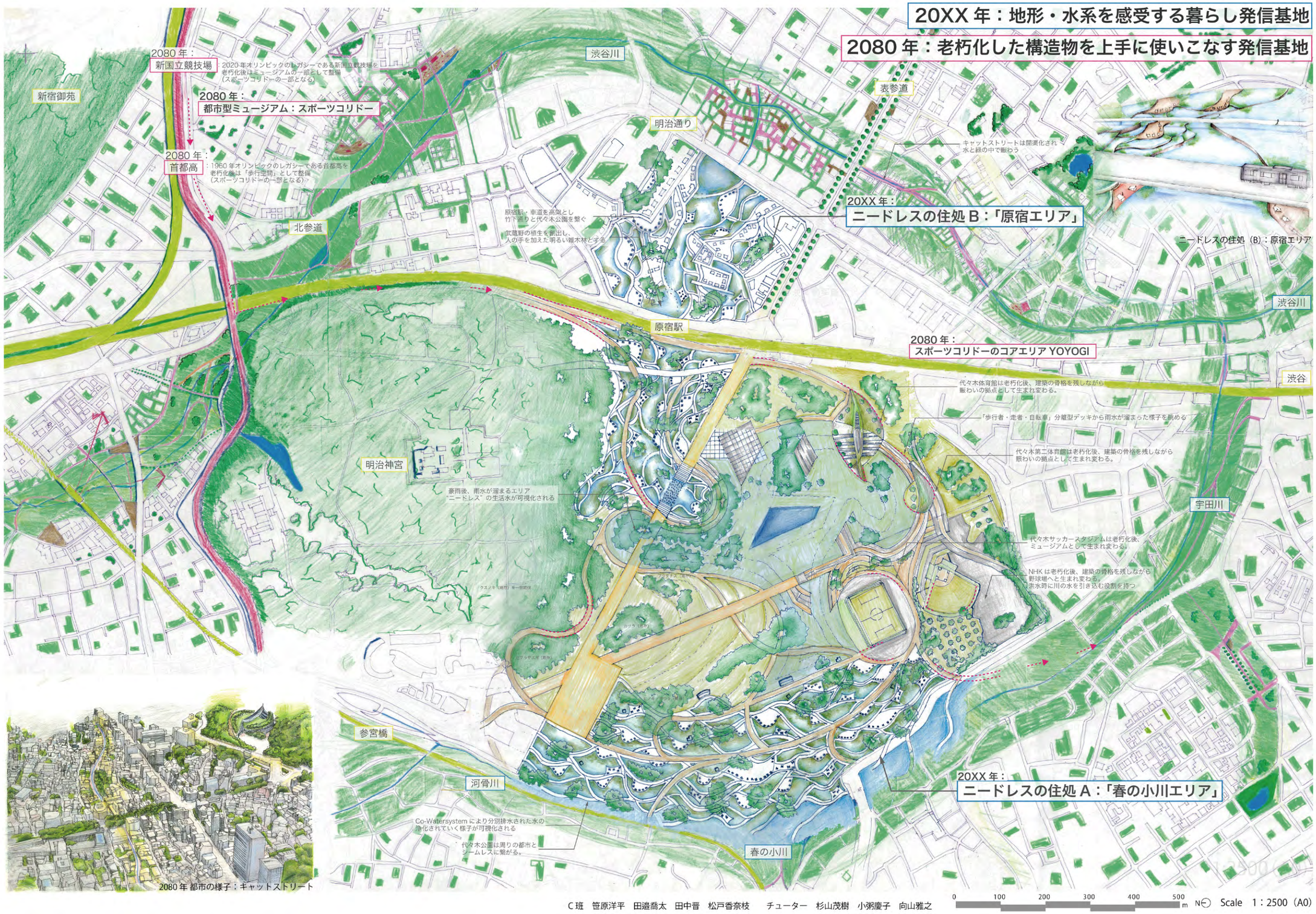
地形に差し込む住宅配置はコモンスペースを取り囲むような配置とする。コモンスペースの広さに応じて、異なる移動手段“ニードレス”を呼び込む。

多様な建築を提案する。移動しながら暮らす人にはそれぞれの理由がある。晴れの日、雨の日、仕事する日、お金がない日と異なった住み方で多様な人を呼び込む。

これは新宿・原宿・渋谷・住宅街などの、特色を持つ街と面した YOYOGI だからこそできる提案である。

20XX 年：地形・水系を感受する暮らし発信基地

2080 年：老朽化した構造物を上手に使いこなす発信基地



2080 年 都市の様子：キャットストリート

C 班　笹原洋平　田邉喬太　田中晋　松戸香奈枝　　チューター　杉山茂樹　小粥慶子　向山雅之

D 重なる４年、重ねる行い
team

summer studio で得たこと

高橋　宏太朗
Takahashi Kotaro
東京農業大学大学院
農学研究科　M１
「デザインすることの楽しさと難しさ、仲間と欠点を補い会えることの心強さを学びました！」

渡邊　絵利加
Erika Wstanabe
武蔵野美術大学
建築学科　B４
「違う分野の人と組んでものをつくりあげる楽しさや難しさ」

髙橋 美里
Misato Takahashi
東海大学
観光学部　B３
「伝わることの大切さ
伝わらないことの危うさ」

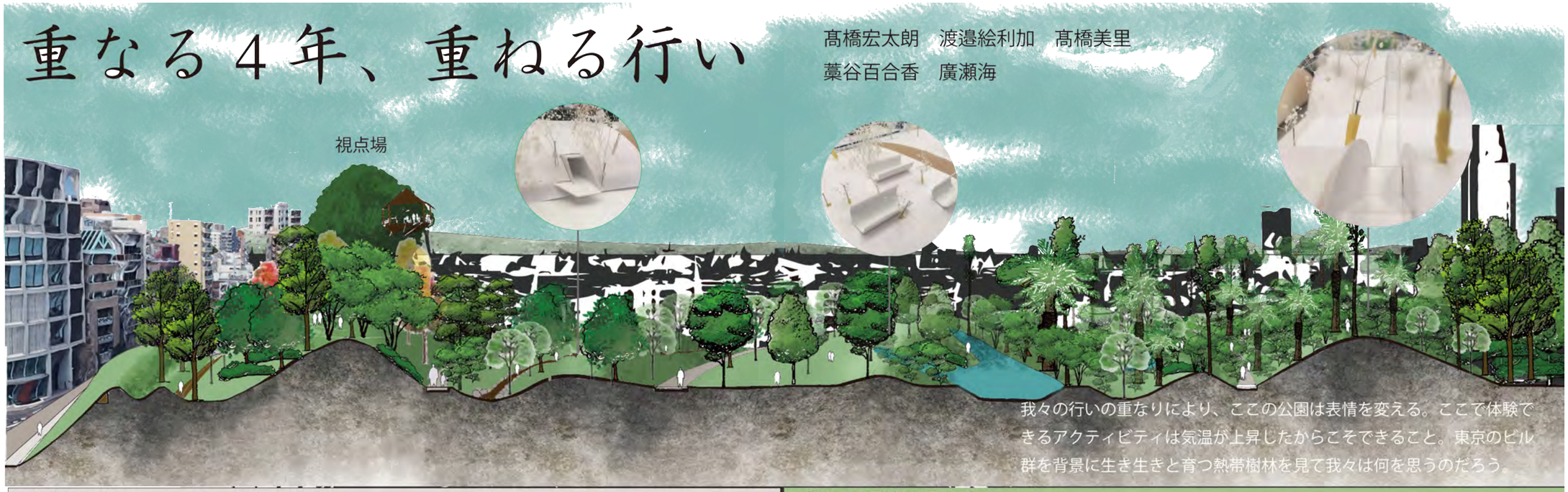
藁谷　百合香
Yurika Waragai
千葉大学
園芸学部　B３
「失敗を恐れず挑戦する大切さ。
仲間の心強さと自分の未熟さ」

廣瀬　海
Kai Hirose
日本大学
生物資源科学部　B２
「絵や模型、ダイアグラムを使い論理的に伝えることの大切さ」

小林　裕太
Yuta Kobayashi
プレイスメディア
「学生の今後になにかプラスの影響を与えられたなら嬉しく思う。」

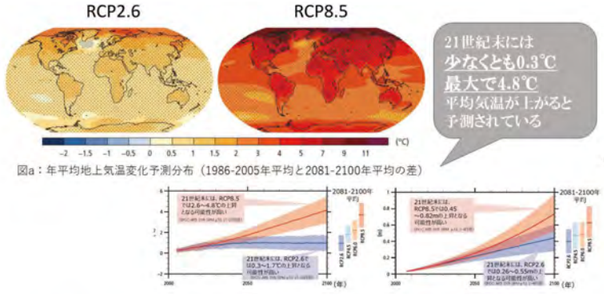
岡田　裕司
Yuji Okada
ネイ &
パートナーズジャパン
「短時間でコンセプトをカタチにまとめ切るスピード感と段取り力」

藤木　遼河
Haruka Fujiki
大林道路
いくら素晴らしくても伝わらなきゃ意味がない。形にする難しさが癖になって欲しい。



地球の現状

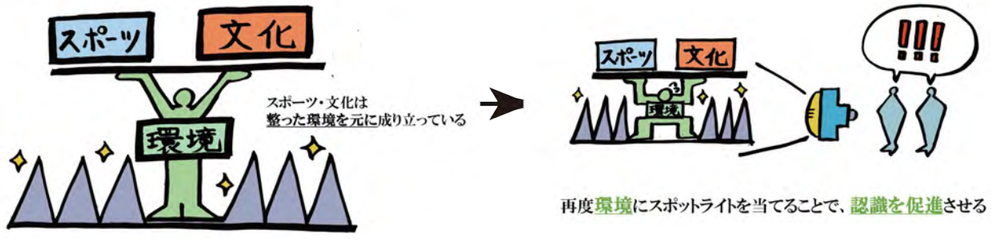
上昇し続ける世界の気温



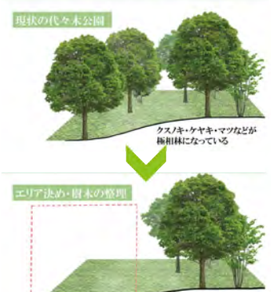
実際に五感を通して気温上昇を感じる場所はない。人々は実際に体感を持って、環境変化を実感する場所が必要である。

皆、図や表でこの事実は認識し、体感でも暑くなっていることは薄々は気づいているだろう。ただ、そこから行動に移すほどの危機感は感じていない人がほとんどである。その問題の解決こそが、地球温暖化を止める一番の近道ではないか。

私たちの考えるオリンピズム

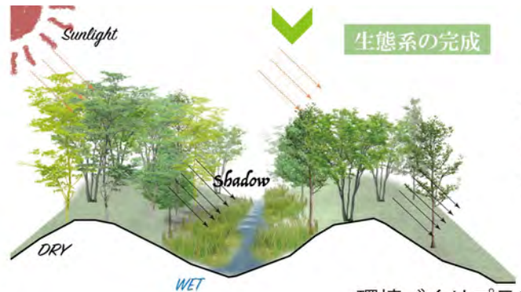


新たな環境の見せ方



地形操作による植物環境の整頓

4 年に一度その年の平均気温に適した植物を一部植樹していく。



生態系を都市空間に育むためのほぼ全ての環境が整う。

環境づくりプラン

４年 ×１５回＝６０年

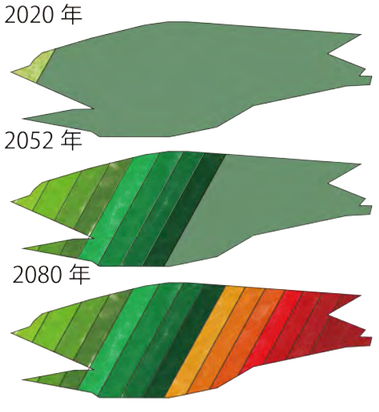
1 回目　2020 年

樹木の利用

切り出した樹木を乾燥期間中のものは、空間作りに、乾燥後のものは、ファニチャーとして公園内で利用し、循環させる。

8 回目

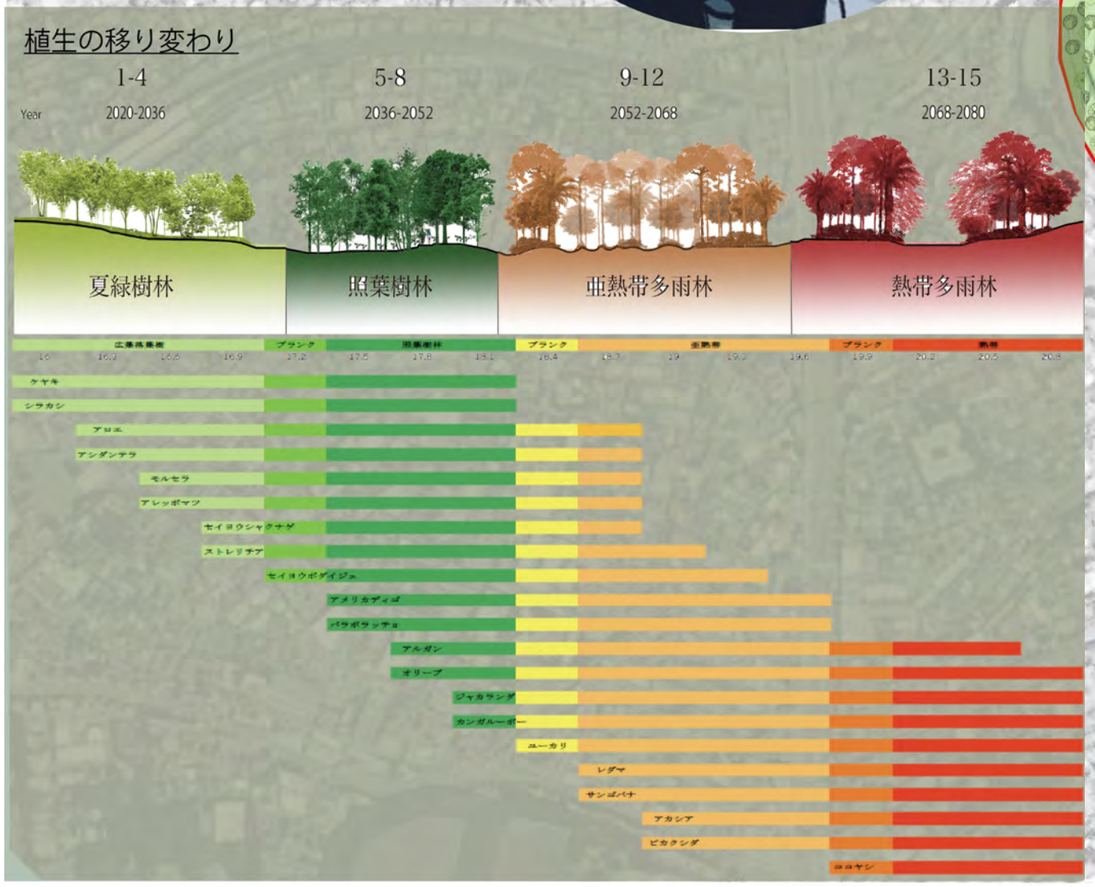
15 回目



エコツアーによる森の散策

植生帯ごとによって異なる料理を
提供する４つのレストラン

植生の移り変わり

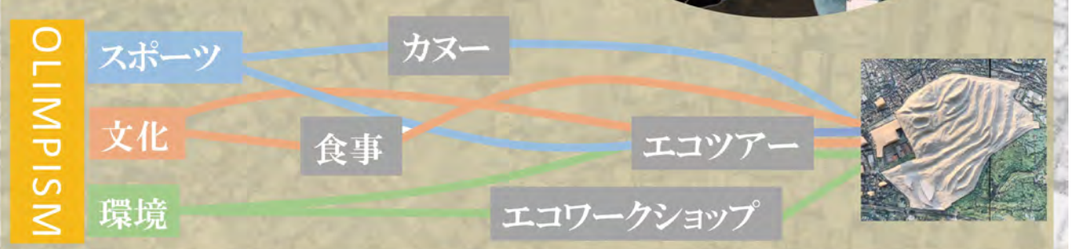


公園内で切り出した樹木を利用
したエコワークショップ

水辺から船で体感する
熱帯樹林帯

オリンピズムを育む公園内のアクティビティ

代々木公園で行われるアクティビティはすべて、オリンピズムの３本柱である「スポーツ」「文化」「環境」に関連する。



E team
でびよりち
出日和地
～弔いと憩いによる「死」を通じた相互理解を育む五輪ミュージアムパーク～

summer studio で得たこと

阿部　遼磨
Ryoma Abe
法政大学大学院
デザイン工学研究科　M1
「サマスタを通して、多角的な視点を身につけることが出来ました」

吉尾　元子
Motoko Yoshio
千葉大学大学院
園芸学研究科　M 2
「お互いの強みを活かしたグループワークの仕方を学べたこと」

金子　将太
Shota Kaneko
東京農業大学大学院
農学研究科　M 1
「空間を描く楽しさや辛さ、人に伝える技術の重要性が身に沁みました」

呂 軒
Hsuan Lu
千葉大学
園芸学部　B 3
「表現力や他人との向き合いの大切さを知りました」

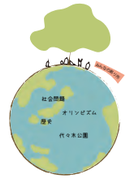
鈴木　友紀乃
Yukino Suzuki
日本大学
生命資源科学部　B 2
「話の聞き方と意見をまとめることの難しさを知れたこと」

岸　孝
Takashi Kishi
プレイスメディア
「敷地ポテンシャルから生まれるデザインの訴求力と推進力」

大木　一
Hajime Oki
オットー・デザイン
「60 年の時間軸で捉えるランドスケープデザインの可能性」

矢作　岳
Gaku Yahagi
文化財保存計画協会
「正解のない課題を解く苦悩と楽しさを共有する価値と意味」

視点

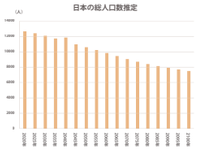


【古代オリンピックの起源】
ゼウスへの折りや感謝を示し、
諸国間の争いを中断させる役割
×
【代々木公園の歴史的位置付け】
国際交流と文化を継承する場
×
【社会問題】
国際化による拠り所の必要性
×
【オリンピズムの解釈】
共通理解を深め文化を形成
その上に平和を築く

背景１ー代々木公園の歴史的位置付け

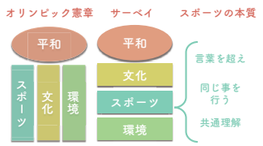
代々木公園：国際交流と文化を継承する場所

背景２ー社会問題



人口減少・移民増加
総人口の１/３以上が外国人の
日本がやってくる・・・

背景３ーオリンピズムの解釈

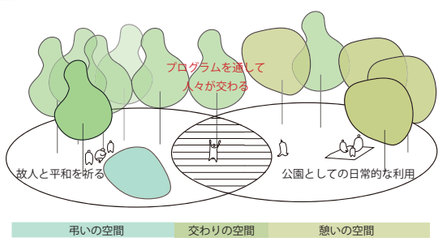


共通理解を深め文化を形成し、その上に平和を築く

コンセプト

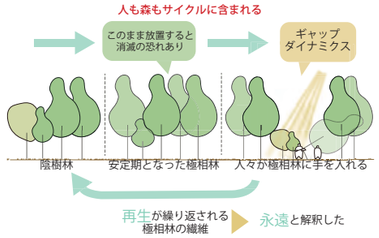
極相林をみんなで管理し環境を維持する。
人々の弔いを通じて相互理解を生む。
国境を越えて人々を祈ることが当たり前の文化となり、
平和が築かれる。

空間デザインダイアグラム

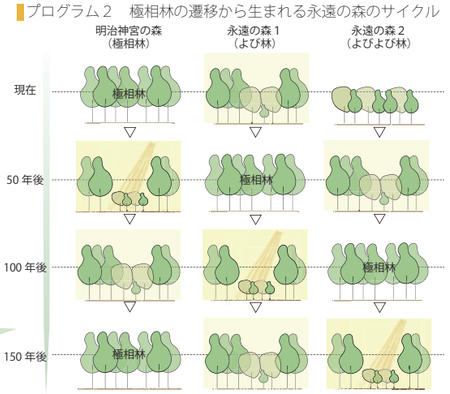


代々木公園内の既存の単相林をもとに混交林を作り出した。
陽樹、陰樹の配合バランスの違いやギャップダイナミクスを起こすことで
極相林に到達するタイミングをずらすし、
代々木公園内のどこかに極相林を維持する。
これを永遠の森とした。

プログラム１　文化と平和を継承するプログラム - 極相林の維持

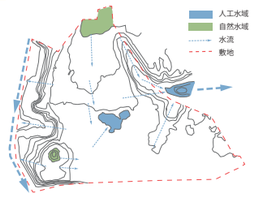


プログラム２　極相林の遷移から生まれる永遠の森のサイクル



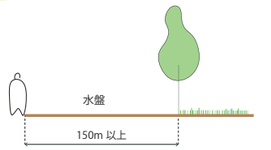
ゾーニング

空間作りのものさし１ - 水域現況図



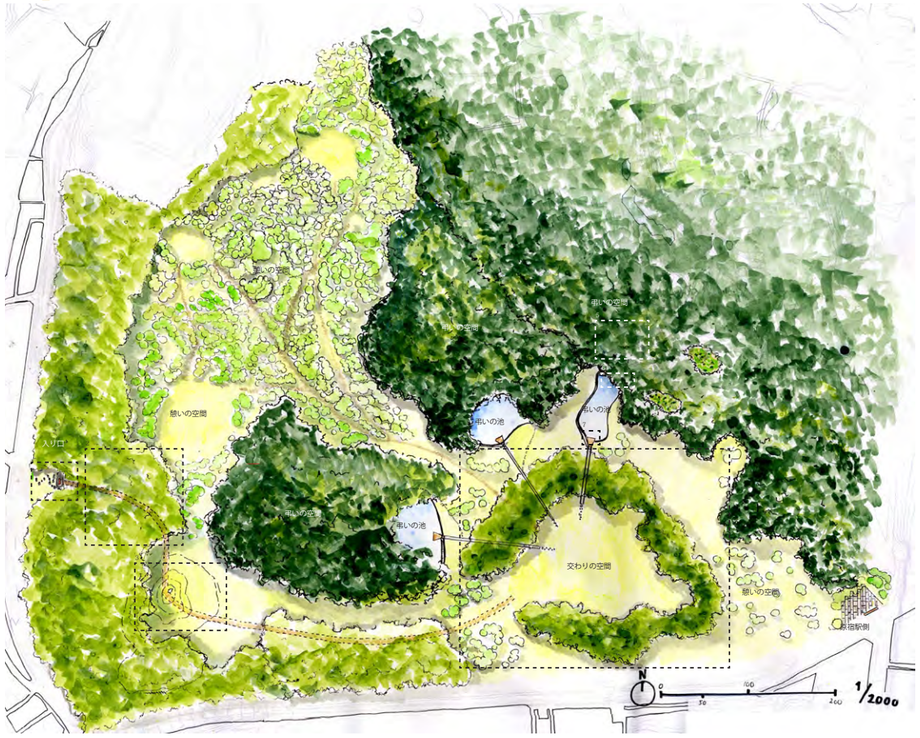
空間作りのものさし２ - 既存樹木現況配置図

空間作りのものさし３ - 人と木と水盤の関係性



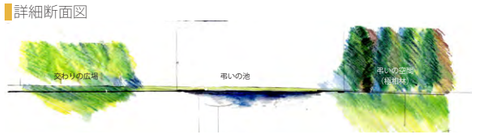
代々木公園で現地調査を起こった際に
「気持ち良い」と感じたスケールが１５０m であった。

マスタープラン



詳細平面図

詳細断面図

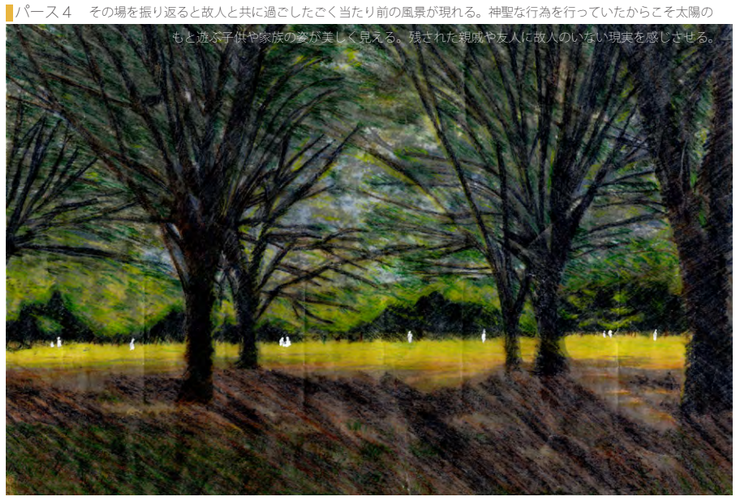


パース３　極相林を出て池にかかるウッドデッキの先端へ向かい、埋葬したところに差し込む光を目印に故人へ祈りを捧げる。

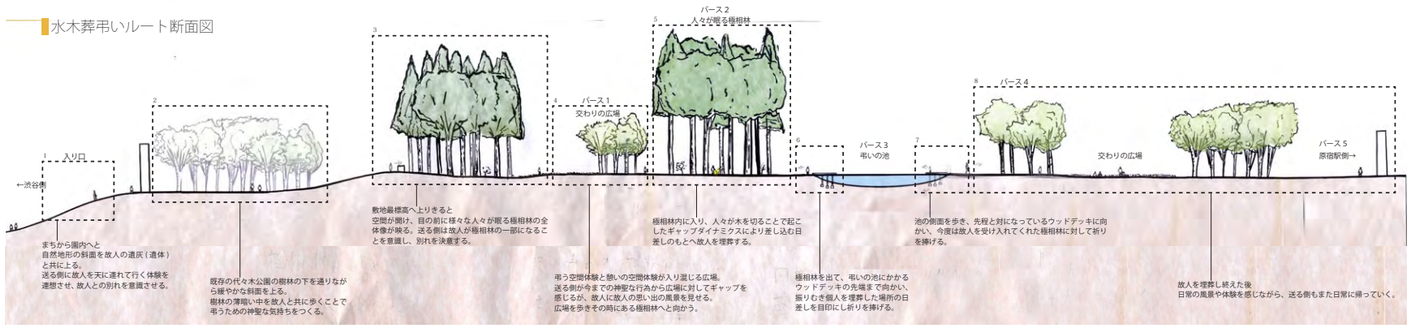
池の側面を歩き、先ほどと対になっているウッドデッキに向かい今度は故人を受け入れてくれた多様な人々が眠る極相林に対して感謝と平和の祈りを捧げる。

パース４　その場を振り返ると故人と共に過ごしたごく当たり前の風景が現れる。神聖な行為を行っていたからこそ太陽の

もと遊ぶ子供や家族の姿が美しく見える。残された親戚や友人に故人のいない現実を感じさせる。



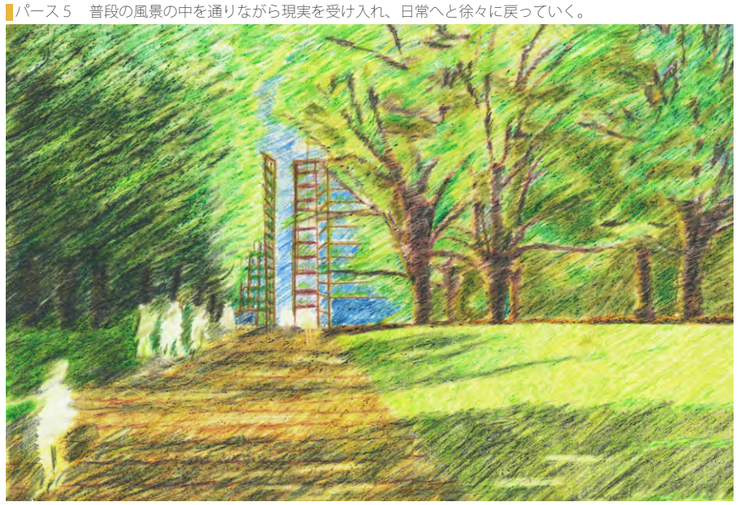
水木葬弔いルート断面図



パース１　憩いの空間を通り、故人に思い出の風景を見せ、極相林へと向かっていく。

パース２　ギャップダイナミクスによって差し込んだ日差しのもと故人を埋葬する。

パース５　普段の風景の中を通りながら現実を受け入れ、日常へと徐々に戻っていく。

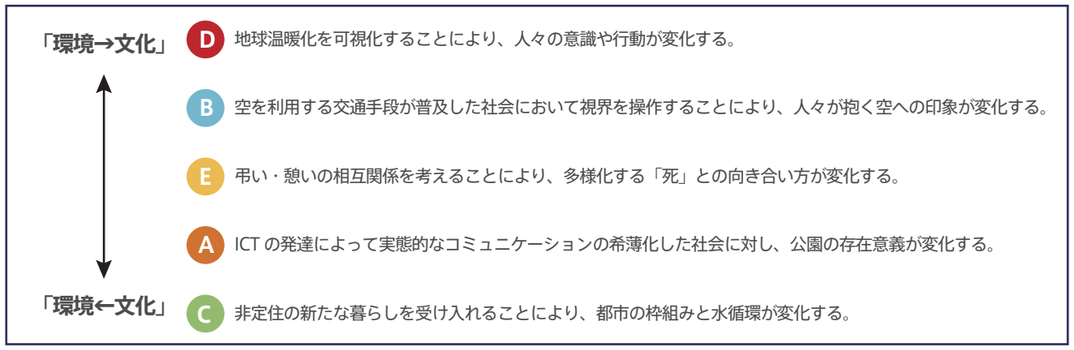


5チームの共通点と提案の傾向

今回のテーマの軸は、「60 年後に何を残すか？」・「五輪ミュージアムパークを描く」の2つであった。60 年後という近くも遠くもない将来、そして「五輪ミュージアムパーク」とは一体どのような場であるのか。私たちの思考の経過を辿ると、「環境ー文化」の関係性を場に与えるという傾向がみえてきた。

「環境→文化」関係：環境が文化に影響することで、文化が環境にはたらきかける。
「環境←文化」関係：文化を環境が受け入れることによって、文化を認識する。

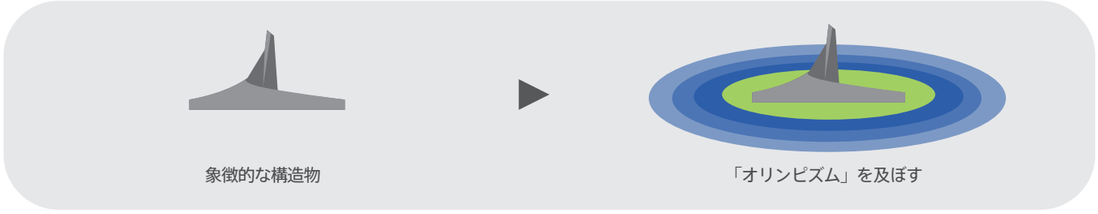
環境が起点か、文化が起点か。どちらにせよ、「環境ー文化」の関係性をどのように場に与えるかが「デザイン」なのではないだろうか。
提案に基づき、各チームの「環境ー文化」関係を示したものが以下の図である。



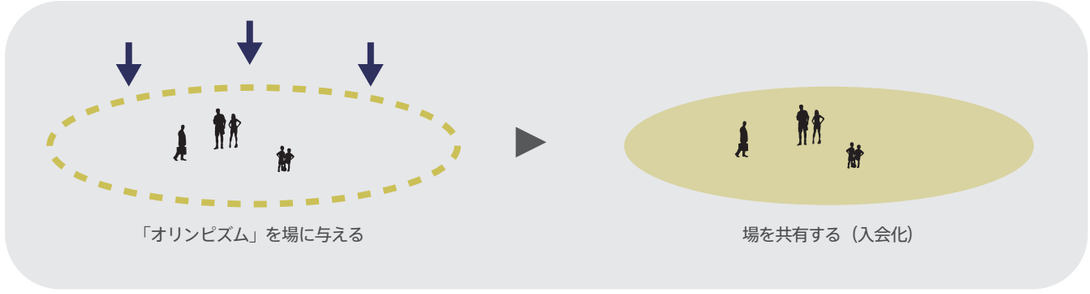
オリンピズムの精神は「文化」「環境」そして「スポーツ」の 3 本柱によって成立する。オリンピズムの根本原則に「オリンピズムはスポーツを文化、教育と融合させ…」とあるように、今回スポーツとの関係性に重きを置いたチームが見られなかったのは、オリンピズムの精神の 3 本柱に時間軸が加わることによって、提案する 60 年後において「スポーツ」と「文化」は融合したとして捉えていたからだろう。

レガシーは持続的なオリンピズムによって成立する

では、「環境ー文化」の相互的な関係性はどのようにして現れるのだろうか。今現在残るレガシーは、まず構造物が中心に置かれ、そしてまわりに影響を及ぼすことで場がつくられていく。オリンピズムの精神は周期的・持続的にオリンピックムーブメントに裏打ちされることで成立している。

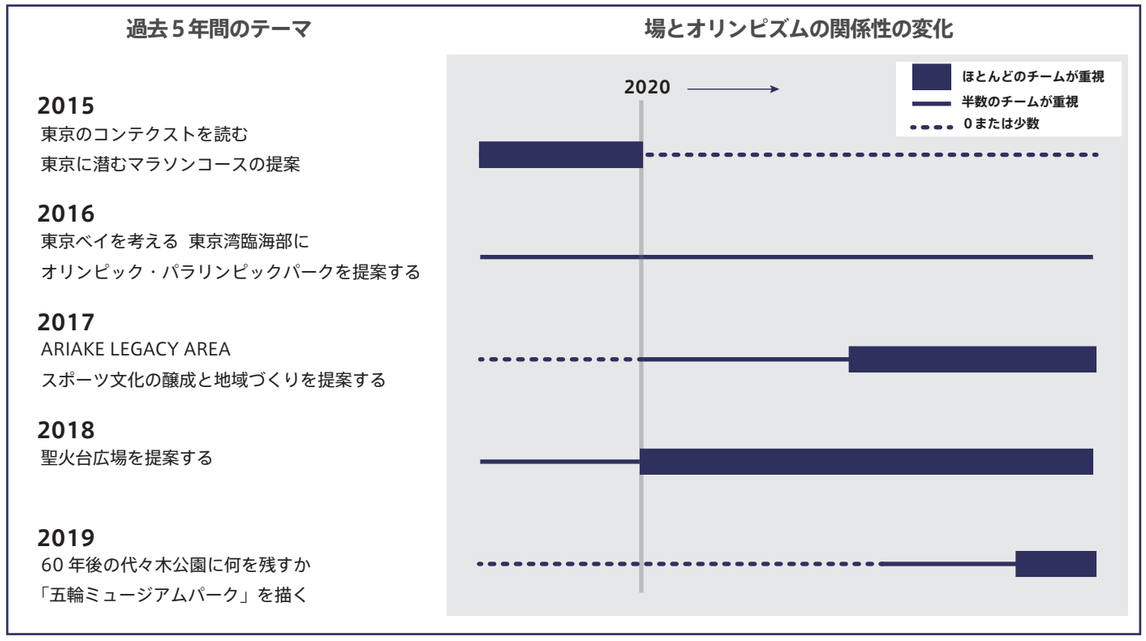


これに対し提案では、オリンピズムの精神である「環境」と「文化」そして「スポーツ」の関係性を持続的に場に与えることにより場が作られていく。「みんなの居場所であり、個人の居場所でもある」といういわゆる入会地（コモンズ）のような考え方が各チームに見られたことから、オリンピズムとランドスケープの関係性の 1 つに「場の共有」があげられるのではないか。



5年間のまとめ　ーランドスケープとオリンピズムの関係性を考えるー

今回浮かび上がった今後より深く考えていきたい場の作られ方を「入会化」として、そのきっかけとなるオリンピズムは場に対してどこに重点を置かれていたか、という観点から過去 5 年間の提案を分析した図が以下である。
我々は 5 年間、東京オリンピックと 5 つのテーマ（①マラソンコース、②東京ベイ、③有明レガシーエリア、④聖火台広場、⑤五輪ミュージアムパーク）を通して、各場所・テーマから東京の将来像やあるべき姿を議論してきた。これらを分析すると、提案のなかでオリンピズムが積極的に誘発されるための時間軸の設定が異なることがわかった。
以下の図の指標の移り変わりを探ると、①減少（2015 年）②変化なし（2016 年）③増加（2017~19 年）の 3 パターンに分類できることがわかる。
このことから考察できることは、場の利用の方向性がそれぞれ異なるということである。例えば、2015 年と 2018 年はどちらもオリンピックまでは同じであるが、オリンピックを境に違いが確認できる。2015 年はオリンピック開催時のマラソンコースの盛り上がりをどうプロモーションしていくかが重視されていたことに対し、2018 年は利用が終わったあとの聖火台広場の利用が重視されていた。オリンピックという特別なイベントにおいては特に、その場がいつ盛り上がりをみせるのかが重要であり、その重きの置き方は経済や観光の分野のみならず、「場」をつくるランドスケープの分野からも提案できるのではないだろうか。



2080 年の未来像　ーオリンピズムという視点から街の在り方を考えるー

オリンピズムの精神は、あらゆる事象を融合する。それは、街も例外ではない。現在街でレガシーと呼ばれているものは競技施設が中心となった同心円構造を持つ。競技施設と周辺との結びつきが強く、隣接または近くにあり、開催後は「ここで昔オリンピックがあった」と魅せるレガシーとして存在する。
2020 年の東京五輪を契機に、ランドスケープを学ぶ者として見つめ直すべきものは何だろうか？未来に何を残せるだろうか？未来は軽々と現在の私たちの想像を超えるだろう。4 年という周期性をもつオリンピックにおいて、その度にその時代に合った価値観で新たに捉えられるものこそがレガシーとなる。「環境」と「文化」そして「スポーツ」、これらから成るオリンピズムの精神をもとに、変わっていくものと変わらないものを丁寧に重ね合わせた街は未来の東京の原風景となるだろう。

SUMMER STUDIO 2019 スケジュール

全体 東京農大にて顔合わせ。どきどきわくわく！

Kick-off meeting 8/3

B 決めた大まかなテーマに対し、とにかくホワイトボードに調査結果を貼りまくる。

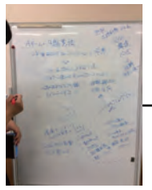
D 真夏の猛暑の中、現地調査。汗びっしょり！

Workshop Day1 8/9

E 現地に行って、みんなが感じたことを共有。

全体 まず最初に、各班まとめてきたことを発表。チューターから様々な意見をいただく。

Workshop Day2 8/10



A 提案の流れや方向性を整理。今後のやることを確認。

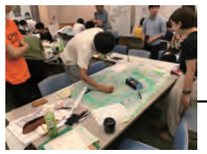
C 考えることが多すぎる…

Workshop Day3 8/11

B 発表で伝わりやすい話し方を教えていただきました。

D 各自、淡々と作業に向かう。

Workshop Day4 8/12



C 巨大平面図の完成まで、あと少し！ラストパートだ！

全体 最終発表、みんなお疲れ気味。4 日間行った成果を伝えきれたか…?

製本 支部大会に向けて、各班ブラッシュアップ。それと並行して、この製本の編集会議。

日本造園学会 関東支部大会 11/23

全体 夏に始まり、気づけばもうすぐ冬に。約４ヶ月はあっという間でした。

2005年～2019年の15回で
累計408人の学生が参加しました。

異なる学部学科で様々な分野を学んでいる学生たちが、同じ１つの作品に向かって取り組みました。
自分の持っている知識を発信したり、相手の技術を得たり、
互いに刺激し合うことで新しい気づきや思考が生まれたのではないでしょうか。
また、実務者のチューターさんからは、捉え方や考え方などを学ぶ上での基礎の多くを学びました。
社会人になった時、再び同じ仲間やチューターさんとどこかで同じ仕事に携われるようになりたいです。

参加学生の学部・学科2015～2019（50音順）
延べ141人の学生が参加

- 宇都宮大学 農学部 農業環境工学科
- 学習院大学 国際社会科学部 国際社会科学科
- 慶應義塾大学 政策・メディア研究科
- 工学院大学 工学研究科 建築学専攻
- 芝浦工業大学 工学部 建築学科
- 多摩美術大学 美術学部 環境デザイン学科 美術研究科 デザイン専攻
- 千葉大学 園芸学部 緑地環境学科 園芸学研究科
- 千葉工業大学 工学部 建築都市環境学科
- 中央大学 理工学部 都市環境学科
- 東海大学 観光学部 観光学科
- 東京大学 理科Ⅱ類 工学部 都市工学科 農学生命科学研究科 森林科学専攻 工学研究科 社会基盤工学専攻 学際情報学府 学際情報学専攻
- 東京農業大学 地域環境科学部 造園科学科 農学研究科 造園学専攻
- 東京理科大学 理工学研究科 建築学専攻
- 日本大学 生物資源科学部 生命農学科 理工学部 建築学科 理工学研究科 建築学専攻
- 法政大学 デザイン工学部 都市環境デザイン工学科 デザイン工学研究科 都市環境デザイン工学専攻
- 武蔵野美術大学 造形学部 建築学科
- 明治大学 農学部 農学科 商学部 商学科 政治経済学部 政治学科 政治経済学部 地域行政学科
- 横浜国立大学 都市イノベーション 学府・研究院
- 立教大学 観光学部 観光学科 コミュニティ福祉学部 スポーツウェルネス学科
- 早稲田大学芸術学校 建築都市設計科

チューターさんの事務所2015～2019（50音順）
延べ 54 人の社会人が参加

- ■アイボリィアーキテクチュア
- ■アプル総合計画事務所
- ■E-DESIGN
- ■大林道路
- ■オットー・デザイン
- ■小野寺康都市設計事務所
- ■グラック
- ■junko awatani
- ■大成建設
- ■竹中工務店
- ■日建設計
- ■ネイ＆パートナーズジャパン
- ■ハイアーキテクチャー
- ■長谷エコーポレーション
- ■向日葵設計
- ■ヒュマス
- ■フィールドフォー・デザインオフィス
- ■プレイスメディア
- ■文化財保存計画協会
- ■ランドスケープデザイン
- ■渡辺美緒デザイン事務所

STUDENTS

[多摩美術大学]

川口豊　美術学部環境デザイン学科 B 3

[千葉大学]

吉尾元子　園芸学研究科 M 2
笹原洋平　園芸学研究科環境園芸学専攻 M 1
田中真由　園芸学部緑地環境学科 B 3
松戸香奈枝　園芸学部緑地環境学科 B 3
呂軒　園芸学部緑地環境学科 B 3
藁谷百合香　園芸学部緑地環境学科 B 3

[東海大学]

髙橋美里　観光学部観光学科 B 3

[東京農業大学]

髙橋宏太郎　農学研究科造園学専攻 M 1
金子将太　農学研究科造園学専攻 M 1
佐藤あかね　地域環境科学部造園科学科 B 3
田中晋　地域環境科学部造園科学科 B 3
濱宇津菜々子　地域環境科学部造園科学科 B 3

[日本大学]

廣田龍平　理工学研究科建築学専攻 M 1
増山太史　生物資源科学部生命農学科 B 3
鈴木友紀乃　生物資源科学部生命農学科 B 2
廣瀬海　生物資源科学部生命農学科 B 2

[法政大学]

阿部遼磨　デザイン工学研究科都市環境デザイン工学専攻 M 1
田邊喬太　デザイン工学研究科都市環境デザイン工学専攻 M 1
堀越義人　デザイン工学研究科都市環境デザイン工学専攻 M 1
増田政弘　デザイン工学研究科都市環境デザイン工学専攻 M 1

[武蔵野美術大学]

渡邉絵利加　建築学科 B 4

[早稲田大学芸術学校]

大石珠央　建築都市設計科 B 3

[筑波大学]

西村生　体育専門学群 B 3 （聴講）

TUTORS

井野貴文 [株] グラック　**大木一** [株] オットー・デザイン　**小粥慶子** [有] 小野寺康都市設計事務所　**岡田祐司** [株]ネイ＆パートナーズジャパン
岸孝 [株] プレイスメディア　**小林祐太** [株] プレイスメディア　**杉山茂樹** [株] 日建設計　**高沖哉** [株] ヒュマス　**原﨑寛明** アイボリィアーキテクチュア
藤木遼河 大林道路[株]　**水嶋輝元** [株] 日建設計　**向山雅之** [株] 竹中工務店　**矢作岳** [株] 文化財保存計画協会

GUESTS

嵯峨寿（8/3話題提供、8/12審査員）
日本オリンピック・アカデミー(JOA)理事
日本オリンピック委員会(JOC)オリンピック・ムーブメント専門部会員

竹内智子（8/3話題提供、8/12審査員）
東京都東部公園緑地事務所　工事課長

田中伸彦（8/3話題提供、8/12審査員）
東海大学観光学部観光学科　教授

福岡孝則（8/3話題提供、8/12審査員）
東京農業大学地域環境科学部造園科学科　准教授

阿部伸太（8/12審査員長）
関東支部長、東京農業大学地域環境科学部造園科学科　准教授　（敬称略）

参考文献

相川貞晴、布施六郎著　東京都公園協会監修・東京公園文庫27「代々木公園」郷学舎
内山正雄、蓑茂寿太郎著　東京都公園協会監修・東京公園文庫20「代々木の森」郷学舎
上原敬二著「人のつくった森」東京農大出版会
今泉宜子「明治神宮ー「伝統」を創った大プロジェクト」新潮選書
日本オリンピック・アカデミー編集「ポケット版オリンピック事典」楽
「都市公園220　特集：代々木公園ー都心で一番広い空が見られる森林公園ー」東京都公園協会

レポート学生編集委員

松戸香奈枝（編集長）・髙橋美里（副編集長）・田中真由（副編集長）
大石珠央・川口豊・田中晋・濱宇津菜々子・堀越義人・阿部遼磨・呂軒・藁谷百合香

学生デザインワークショップ企画・運営委員

向山雅之（竹中工務店）
井野貴文（グラック）　大木一（オットー・デザイン）　岸孝（プレイスメディア）
小林祐太（プレイスメディア）　杉山茂樹（日建設計）　高沖哉（ヒュマス）